

知恵と文化の京都環境フォーラム

～低炭素社会づくりに生かす京の知恵～

講演録

【日時】平成21年2月14日（土） 午後1時30分～4時30分

【場所】南禅寺 龍淵閣

【主催】京都府・大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所

【次第】

開会挨拶	京都府知事	山田 啓二
基調講演	「サステナブル社会における経済と人間生活のあり方」 経済学者（日本学士院会員・東京大学名誉教授）	宇沢 弘文 氏 池坊 美佳 氏
フォーラム	華道家 京都大学大学院経済学研究科・地球環境学堂教授	植田 和弘 氏 山折 哲雄 氏
	宗教学者 (コーディネーター) 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 所長	立本 成文 氏 猿渡 知之
閉会挨拶	京都府副知事	

目 次

基調講演	1
フォーラム	9

基調講演

「サステイナブル社会における経済と人間生活のあり方」

経済学者 宇沢弘文氏

こんなすばらしいところで何か話をしろというのは私にはとても荷が重くて、さきほどからどうしたらいいかと迷っています。ただ、お約束したので、何とか勇気をふるってお話をさせていただきたいと思います。

私は、ただ今ご紹介いただきましたように、経済学を専門としています。最近、例えば今度のサブプライムに始まる平成大恐慌とか、それから深刻な日本の社会破壊、小泉・竹中政権のいわゆる改革の帰結ですが、そういうのを見ていますと、経済学が非常に悪い役割を果たしているという感じを持たざるを得ません。

実は私は、若いときお寺に預けられていました。私の家は浄土真宗だったのですが、そのお寺は曹洞宗のお寺で、鳥取県と岡山県と広島県のちょうど3つの県の県境にある、すばらしいお寺でした。初めは得度を得たいと思ったこともあったのですが、とても私の力では及ばない。東京の学校に通っていましたが、当時食糧事情が悪くて、しょっちゅう休みのたびにお寺に帰って修行をしていました。しかし、まったくものにならないので、あきらめざるを得ませんでした。そのことがずっと心にかかっていた。

実は私は、旧制一高で医学部志望のクラスでした。ところが、ヒポクラテスの誓いという非常に厳しい掟を誓わなければいけない。それから、当時『ヒポクラテス全集』の、小さい本ですけれども52巻の訳本が出たりして、それを読んで悩みが深くなっていったのです。とても自分には医者になるということではできない。ヒポクラテスの誓いには一生、患者のためにすべてを捧げて、そして自分の邪な心を一切捨てる。お寺のように難しいことが要求されて、私はとてもだめだと思いました。学校の成績も悪くてどこにも行けなくて数学科に入ったのですが、やはり医師になる志を捨てたことを非常に悩みました。当時、経済は破綻、社会的にめちゃくちゃになっている。そういうときに数学というどちらかというところと貴族趣味的な学問を自分の専門とすることに強い違和感を感じた。そして医学が人の命を救う、人の病気を治すとすれば、経済学は社会の病を癒すというふうに自分に言い聞かせて、経済学に移りました。

アメリカ、イギリスで長いこと教えていましたが、ベトナム戦争を契機に日本に帰ってきました。そして日本の経済社会、あるいはアメリカもそうですけれども、惨憺たるありさまを見て、私は経済学が社会の病を作っているという感じを強く持って、それから何とかして経済学が人間のためになる学問でなければいけないと、いろいろな努力をしましたが、余りものにならない。ただ、その過程で私は1つ大事なことに気がついたのです。すべてをお金に換えて、そして人間の持っている大切なもの、あるいは社会にとって大切なものをお金に換えると幾らになるかということをはたすら追求するという、非常に極端な形の経済学が当時流行していました。市場原理主義と言った方がいいと思いますが、その似非経済学に対抗するために、私の一生を通じて、一人ひとりにとって大切なものとか、あるいは社会にとって大切なもの、それはどういうものだったのかということ振り返って、長いこと悩みました。

そのときに一番最初に心に浮かんだのは、一高の生徒のときの幾つかのエピソードです。

さきほど申し上げましたように、私はお寺にいたのですが、1945年8月15日敗戦。急いで一高に帰ってきました。当時、一高は師団司令部が本館を使っていました。私たちは隅っこに小さくなって学校生活を送っていたわけです。それから解放されて、自由になったという気持ちを強く持っていました。ところが、8月31日にマッカーサーが厚木に降りて、そして過酷な占領が始まりました。一高は師団司令部として使っていたということもあって、軍の施設とみなして、占領軍が接收にやってきました。そのときに一高の校長先生は安倍能成というカント専門の、戦前のリベラルな考え方を代表する哲学者でした。安倍先生が応対されて、こういうことをおっしゃったのです。「この一高はリベラルアーツ (liberal arts) のカレッジである」と。リベラルアーツというのは、人類がこれまで残してきた遺産、それは学問・芸術・文学・音楽、分野をまったく問わないで、ただひたすら吸収して、そして一人ひとりの人間的成長に資すると同時に、その大切な遺産を子どもたち、次の世代に残す、伝える、そういう営為をする場である。そういう意味で聖なる場所である。セクレッド・プレイス (sacred place) である。占領というヴァルガー (vulgar) な目的には使わせないときっぱりおっしゃったのです。占領軍の将校たちは、それを聞いて黙って帰っていった。そのエピソードはずっと心に焼きつけられていました。後になって、社会的共通資本という概念を考えましたが、一人ひとりにとって大切なものとか、あるいは社会にとって大切なものを社会の共通の財産としてすばらしい形で維持して、子どもたちの世代に残す、それが社会的共通資本の原点です。社会的共通資本の考えが最初に芽生えたのが安倍先生のエピソードだった。学校教育、学校は人類がこれまで残してきた大事な遺産を次の世代に伝えるという大切な社会的共通資本であって、占領という世俗的な目的には使わせない。

安倍先生はその後、文部大臣になりました。マッカーサーは日本の占領政策の中で教育改革に一番重点を置いていました。つまり日本が無謀な戦争を始めたのは教育が悪かったのだという発想だったのです。マッカーサーは本国から、たしか20数名の大きな調査団を呼んで、日本の教育制度の改革の指導に当たらせてわけです。安倍先生はその調査団を迎えて、文部大臣として挨拶をされました。そのときにこういうことをおっしゃったのです。日本が占領中犯した一番大きな罪は、占領した国へ行って、その国の歴史・社会・文化を無視して、日本の制度を押しつけたことだ。特に教育に一番大きい問題がある。あなた方は占領国を代表して日本の教育制度の改革の指導に来られたけれども、日本政府が犯した同じ罪を決して犯さないでほしい。安倍先生は非常に英語のお上手な方でした。そして、団長が安倍先生のその言葉に感動して、演壇に飛び上がって、安倍先生に握手を求めた。全員が割れるような拍手をした。これもまた占領のときの非常に珍しいエピソードです。

実はアメリカの調査団の団長をはじめ主な人たちは、ジョン・デューイの教えを受けていた人たちだったのです。ジョン・デューイは19世紀の終わりから20世紀半ばにかけて、アメリカで一番大きな影響力のあった教育学者だと思います。彼の基本的な理念はプラグマティズムと言われているのですが、むしろリベラリズムの考え方に従って教育を行うことを考えたといった方がいいと思います。一人ひとりの人間の人間の尊厳を守り、魂の自立を支え、そして市民的権利を十分に享受できるような、そういう理想的な世界の実現を目指して政治的・社会的運動を展開するか、あるいは学問的研究をしていくというのがジ

ジョン・デューイの言う意味でのリベラリズムだったのです。ジョン・デューイは、その考えを3つの原則にまとめています。

第1は、学校に来るようになって、それまで家庭とか地域社会、あるいは民族的、あるいは経済的・社会的な狭い環境の中で育った子どもたちが学校の教室で、バックグラウンドの違った子どもたちと一緒に遊んで、学ぶということを通じて、一人の社会的な存在としての成長を助けるのが第1の目的である。社会的統合の原則というふうに言っていますが、ジョン・デューイが強調した有名なスローガンがあります。それは **Learning by Doing**。つまり一緒にものを作ったり遊んだりすることを通じて学んでゆく、決して教科書で学ぶのではないというのがジョン・デューイの教育理念を象徴する言葉です。

2番目は、子どもたちは生まれながらそれぞれ異なった資質を持っている。ある子どもは歌を歌うのがうまかったり、あるいは文章を作るのがうまかったり、あるいは走るのが得意だったり、子どもによってそれぞれ違った分野ですぐれた才能を持っている。そういうのをできるだけ育てる。と同時に、一人の社会的存在、人間として成長を図る、それを助けるのが教育の2番目の目的だ。人格的発達というような言葉で表現されていますが、そこでジョン・デューイが強調したのは、子どもたちは生まれながらに違った資質、能力を持っている。それをできるだけ育てると同時に、一人の社会的な存在としてバランスのとれた人間に成長するように助けるのが第2の目的だ。

第3は、どんな地域に生まれても、どんな貧しい家庭に育っても、そのときに社会が提供できる最高の教育をすべての子どもたちが受けることができるような条件を作る。これがデューイの公教育の理念だったわけです。この3つが、20世紀前半、単にアメリカだけでなく、世界の多くの国で学校教育の理念として掲げられました。

ジョン・デューイは実はシカゴ大学の教授をしていました。そして、彼が教授をしているときに、大学に実験小学校(Laboratory School)を設けました。私の上の子が2人、たまたまジョン・デューイの作った実験小学校に通っていました。教科書なんかなくて、子どもたちがお互いに議論しながら自由に、そしていろいろな本を読んで、議論しながら成長していく。ジョン・デューイの理念がそのまま実現されるような、素晴らしい小学校でした。

今お話しした3つの原則ですね。実は日本では福沢諭吉がジョン・デューイよりも早く同じようなことを日記に書いたり、あるいは実行に移しています。ですから私は、ジョン・デューイはむしろ福沢諭吉の教育理念を1つの哲学的な体系としてまとめたというふうに理解したいと思っています。

このジョン・デューイの学校教育の理念は、私が社会的共通資本としての学校教育を考えるときに一番中心に考えています。なかなかそういうリベラルな教育理念を実現するというのは難しい。ジョン・デューイ自身も実はシカゴ大学をその後、追われます。シカゴ大学はロックフェラーが作った大学で、19世紀の終わりごろに作られたのですが、当時ロックフェラーはアメリカで一番悪名高い資本家でした。ジョン・デューイが追われ、またその直前にソースティン・ヴェブレンが追われている。ヴェブレンはアメリカの生んだ最も偉大な経済学者だと私は思いますが、非常にリベラルな経済学者でした。ヴェブレンはスタンフォードに行き、その後転々とするのですが、それから30年近くたってから、また2人がニューヨークで一緒になって、**New School for Social Research** という新しい大学を立ち上げます。第一次世界大戦でヨーロッパの文化が崩壊し、そしてヨーロッパの知識人が

多くアメリカに新しい世界を求めて移ってきて、ニューヨークに New School for Social Research を立ち上げたわけです。今でもすばらしい大学として残っていますが、その大学の特徴はカリキュラムがないことです。学生は1人の教授のアドバイスを受けながら、4年間何を勉強するかという自分で自分のためのカリキュラムを作って、そして4年間そこで勉強する。いわゆる資格とかは特別になくて、その大学で4年間学んだということが人生で一番大きな資産になるような、そういう教育です。

その教育理念をまとめたのが有名なソースティン・ヴェブレンの高等教育、大学論です。副題があって、「もしビジネスマンが大学を経営したらどうなるか」。とんでもない悲惨なことになるという意味を込めて。

小泉・竹中の改革の一環として教育改革が強行されて、今実行に移されていますが、その基本的な考え方は、子どもたちに株式市場などで取引して、そのもうけのおもしろさを教えようという竹中平蔵の学校教育改革の考え方です。文部科学省や、金融庁、財務省、経産省などを巻き込んで、2007年7月、金融経済教育元年というサミットを立ち上げました。

そのときに基調講演をしたのが当時の日銀総裁の福井俊彦という人です。彼の基調講演はこういう内容です。大切なものはお金に換えなさい。お金に換えておけば、価値を保存して、必要なときにまたそれを使うことができる。このような考え方に基づいて全国の中学校や高校に、株のおもしろさを教えるコースなんかを設けているのです。その福井俊彦の基調講演は、ちょうど彼が村上ファンドに投資して巨額のもうけを得たときです。私、あるところに破廉恥極まりない発言というふうに書いたのですが、彼は当時の総理大臣、小泉に頭を下げて、そのまま日銀総裁のポストにしがみついたわけです。ゼロ金利を長いことにわたって続け、現在の日本の悲惨な状況を生み出すのに非常に大きな役割を果たしたのです。

大切なものは決してお金に換えてはいけません。人生で一番大きな悲劇は、大切なものを国家権力に奪い取られてしまう。あるいは追いつめられてお金に換えなければならなくなったときです。私は公害とか土地収用の問題で全国を回ってきましたが、いずれも先祖から伝えられてきた土地を、農地が主ですが、それを強制収用で取られてしまう。成田がそうでした。そういうときの農民の苦しみ、悩みは非常に大きいものがある。国家権力に取られるか、追いつめられて大切なものをお金に換えなければいけなくなった、それが人生で一番苦しいときです。

そういうことを進めるということはまったく異様とお考えになるとと思いますが、実は経済学の1つの考え方に市場原理主義という考え方があります。シカゴ大学のミルトン・フリードマンという経済学者が中心になって、世界中にそれを広めました。私が理想としている社会的共通資本としての教育とか、あるいは大学とはまったくかけ離れたものであるわけです。

この市場原理主義というのは、シカゴ大学のミルトン・フリードマンが積極的に売って歩いたわけですが、学問的、経済学的にまったく内容はほとんどない、支離滅裂です。人生最大の目的はもうけることだ。政府は、企業の活動をできるだけ精いっぱい自由にして、そしてもうけのチャンスを増やす。それが小泉・竹中の改革の基礎にあります。

この考え方が、実は、現在の大恐慌「平成大恐慌」の原因を作ったものです。「昭和

恐慌」とよく比較されますが、昭和大恐慌は、1929年の10月から11月にニューヨークの株式市場で大暴落が続けて起こって、そしてアメリカの金融市場の崩壊、それが実体経済に影響を与えて、1929年から1933年の4年間ほどの間に、倒産した金融機関が1万近く。国民所得は半分。1933年、ルーズベルトが大統領になったときは失業率が25%、農村を除くと失業率は37.5%という、アメリカ始まって以来の大惨事になったわけです。

フーバー大統領の政策の基本的な考え方はつぎのようなものです。超富裕者を対象に大幅な減税をする。政府の財政支出を減らして、できるだけ銀行の投機的業務を自由にする。そういった、今では信じられないような政策を断行したわけです。それは当時支配的な新古典派的な経済学の教えにそのまま従ったわけです。1932年には何万という失業者がワシントンDCのポーツマス河畔にテントを張って、何週間にもわたって大々的なデモをしました。そこで、フーバー大統領は軍隊に命令して、弾圧させたのです。そのときの軍隊の司令官がマッカーサーです。マッカーサーは、フーバー大統領の期待に十二分にこたえて、失業者を徹底的に弾圧したわけです。アメリカの人たちにとってマッカーサーのイメージは、その残酷な失業者弾圧の姿です。

マッカーサーがトルーマン大統領に解任されて本国に帰ったとき、アメリカの上下院合同でマッカーサーを証人に呼んで、2日間にわたって公聴会が開かれました。そのときにマッカーサーがこういうことを言ったのです。平和憲法に第9条を入れさせたのは私だった。それは幣原喜重郎が自分のところへ来て、こういうことを言った。「軍人であるあなたにこういうことは言いづらい。しかし、日本がこれから世界で生き延びていくためには絶対に軍隊を持つてはいけない。だから憲法の中に日本は軍隊を持たないということを明示的に入れたい」と。それを聞いてマッカーサーが感動して、幣原喜重郎に、いろいろ困難を伴うかもしれないけれども、入れるようにアドバイスした。自分が第9条を入れた責任者だと。それは先ほど言いましたアメリカ人の間のマッカーサーのイメージを180度変えて、マッカーサーを大統領候補にという大きな運動が起こりました。ところが、マッカーサーは、選挙事務所のスタッフと事ごとに言い合って、とうとうスタッフ全員やめてしまうという結末になったと話が残っているほどです。

先ほどのミルトン・フリードマンという人が今の市場原理主義、サブプライム大恐慌の一番原因を作った人です。

昭和大恐慌のときにルーズベルトが大統領になって、いわゆるニューディール政策というのを始めたのです。その第1が銀行法の改正でした。それは20年代を通じて投機的なバブルがいろいろなところで起こってつぶれていくのですが、それが最後にニューヨークの株式市場を襲って大惨事になる。もともと銀行が投機的な業務にお金を貸したり、あるいはみずからやるということが大きな原因で、そこで証券業務と銀行業務とを峻別して、それは別々に、決して混ぜてはいけないというのが33年の銀行法の一番のポイントだったわけです。それからもう一つはテネシー・バレー・オーソリティ。つまり南部の7つの広大な州のテネシー川の流域を政府の手で大々的に開発する。ダムを造り、発電所を造り、道路を造り、鉄道、そういうインフラストラクチャーを整備して、そして産業を興す。この2つが実はニューディール政策の一番の柱で、それがある程度成功しかけるのですが戦争になってしまったというのが、この前の大恐慌の帰結だったわけです。

ミルトン・フリードマンは、ニューディール政策をもとに戻すということに執念を燃や

した人です。特にテネシー・バレー・オーソリティについては、実は何回も訴訟が起こって、連邦最高裁で違憲の判決を受けて、最後に 1943 年にその組織を大幅に改組して、憲法に違反しないようにした。しかし、実質的にはさまざまな形で、公的な資金で地域開発を行うという形で残った。それを民営化させようという大きな運動を起こすわけです。

1964 年、ジョンソンとゴールドウォーターの大統領選挙の争いがあったわけですが、ゴールドウォーターを説得して、ゴールドウォーターの選挙公約の中に T V A を民営化するという公約を入れたのです。ところが南部の人々は、公的な資金で作られた T V A が安い安定した電力、その他の社会的インフラストラクチャーを供給して、町あるいは地域を活性化するのに非常に大きな役割を果たしていたということをよく知っていた。そこでゴールドウォーターは大統領選挙どころではなくて、政治家としての生命が危ういという状態になって、ゴールドウォーターという人は政治家ですから、その公約を撤回した。

それからもう 1 つ、ゴールドウォーターは、こういうことを大統領候補として提案したのです。それは当時泥沼に入っていたベトナム戦争は、水素爆弾を使って解決すればいいと。そして世界中から非難を浴びて、そのときにフリードマンが敢然と立ち上がって、ゴールドウォーターをディフェンドしたのです。そのときに彼は、何百万人の人が殺されるかもしれない。しかし **One communist is too many** と言った。私はシカゴ大学にいました。あれほど恥ずかしい思いはありませんでした。ところがゴールドウォーターは変わり身が早くて、非難を浴びるとすぐ撤回した。のちに、フリードマンのことを **He is too extreme**、とって非常に大きな話題になったことがあります。

フリードマンは、もうけのチャンスをできるだけ多くするために、民営化をすべての面で徹底させる。アラン・エントホーフェンという経済学者がいます。彼はマクナマラという国防長官、ベトナム戦争遂行の責任者だったのですが、そのマクナマラがエントホーフェンを登用して、ベトナム戦争遂行の戦闘以外の実務の総責任者にしました。そのときにエントホーフェンが **Kill-ratio** という概念を導入した。**Kill-ratio** というのは「ベトコン」1 人を殺すのに何万ドルかかるか。殺戮比率、それをできるだけ安く上げよう。つまり、限られた戦争予算のもとで、「ベトコン」を、できるだけ数多く殺すということを戦争の目的に掲げたのです。それがニューヨークタイムスに報道されて、そして世界中から大変な非難を浴びる。このエントホーフェンという人は市場原理主義の権化のような人で、彼はサッチャーにも呼ばれて、イギリスのナショナルヘルスサービスを大改革しました。市場原理主義的な考え方に従って内部市場というものを導入した。つまり老人が死ぬまでの医療費をできるだけ安くあげる、それを政策の目的に掲げました。例えば 60 歳以上の老人は腎臓透析をすることを、たとえ本人が払うと言っても禁止するという通達、つまり 60 過ぎの老人に腎臓透析をしても余り効果がない、どうせすぐ死ぬのだから、医療費を節約すると。その考え方は小泉内閣でそのまま実行に移された。後期高齢者医療制度というのは 1 人当たりの医療費をできるだけ安く上げようというエントホーフェン的な考えに基づいた制度です。

実はサブプライムローンも、同じ性格です。ブッシュ政権で I T バブルの崩壊に直面し、金持ちに重点的に減税措置をとったわけです。多分、平時で一番大きな規模だったと思います。そのときの考えは、金持ちに恩恵を施すと、その恩恵は、しずくが垂れるように貧しい人にも行き渡ると。**Trickle Down Theory** という、これは市場原理主義者のアイデア

です。それともう1つ、イラクの戦争を始め膨大な財政赤字。そこで経常赤字、財政赤字をドルとか国債でカバーしていたわけです。それでもカバーできなくなって、そこでサブプライムローンというのを考え出したわけです。サブプライムローンというのは、今まで2回利子支払いを滞った人とか、そういう単に貧しいだけではなくて、もう一回何かすると完全に破産宣告を受けるというような人を対象に住宅ローンを作ったのです。それは最初は2%か3%という非常に安い金利で2年間ぐらい。そしてそれを2年たつと金融工学を使って、それをベースにして新しい金融商品を作って売り出した。それをグリーンSPANが大々的に推薦したわけです。

実は金融機関も非常に大切な社会的共通資本です。そういうものを経済学ではこれまで普通の商品のように取引するように考えてきた。医療も医療サービスを売る人と買う人というふうに分けて、そしてマーケットを設ければいい。教育も、教育をする方と受ける方とマーケットで取り引きすればいいというのがフリードマンを中心とした市場原理主義の考え方です。この30年ぐらいでしょうか、世界中で、いろいろなところで大きな問題が起きていますが、そのほとんどがこの市場原理主義。また、アメリカにとって非常に都合のいい考え方、つまり貧しい人をタネにしてもうける、あるいは外国にそれを押しつける。市場原理主義者の一番のねらいは、世界中の大事な社会的共通資本として守ってきたものをもうけの対象にするということです。一番最初にねらったのは、やはり国鉄と郵便局です。イギリスの場合もそうでした。郵便局とか国鉄、そういう大切な社会的共通資本をねらって、それを民営化していく。それをアメリカの金融資本がマネージする。そして巨大な利益を得るという流れ。しかし、社会的共通資本というのはそうではなくて、決してマーケットで取引するようなものではなくて、大事なもののなのです。

先ほどの安倍先生は一高をリベラルアーツ、学校教育の一番中心として社会的共通資本として考えようということ。それから、社会的共通資本のエッセンスを一番医療が伝えていると思います。

医学を断念したときにもう1つ私の心にかかった言葉があって、それは有名なヒポクラテスの言葉です。Vita brevis, ars longa (Life is short, art is long) という有名なヒポクラテスの言葉があります。「人生は短く芸術は長し」というふうに訳されて、実は私はそのとき非常に奇異に感じました。なぜヒポクラテスがそういう言葉を残したのか。私は芸術はまったくだめで、それも断念した理由の1つだったのですが、ところが後になって、アートというのは医術を意味していることを知ったのです。人生は短い。その短い人生を、人の命を救う医療、医の道は永遠の生命を持っている。それはなぜかというと、お医者さんは師の教えを守って、一生ヒポクラテスの誓いに忠実に医の道を歩む。そして必ず弟子に医の道を伝える。そうすると、短い命を救う医術は永遠の生命を持って次の世代に伝えられていく。これが恐らく社会的共通資本としての医療、あるいは一般の社会的共通資本の一番の核心だというふうに思います。

実は私、20年ほど前に当時のローマ法王のヨハネ・パウロ2世のアドバイザーをしたことがあります。歴代のローマ法王が出される非常に大事なドキュメントがあります。エンスキリカル。日本語では同文通達、あるいは回勅というふうに訳されています。これは歴代のローマ法王がご在任中に必ず1つは出される。それはそのときどきの世界に非常に大事なことについてローマ教会の公的な考え方を非常に分厚いドキュメントにして、それを

全世界のビショップに配布される。それで同文通達というふうに言う。

歴史的に一番有名な回勅は、1891年5月に出されたレーラム・ノヴァルムという回勅です。それは経済学の考え方にも非常に大きな影響を与えた回勅です。そのレーラム・ノヴァルムというのはラテン語で新しいこと、カトリックの方は革命というふうに訳されています。これには副題がついています。Abuses of Capitalism and Illusions of Socialism、つまり「資本主義の弊害と社会主義の幻想」という印象的な副題です。これは当時、特にイギリスの新工業都市で、資本家が労働者を徹底的に搾取して、そして一般大衆労働者は非常に悲惨な生活をした。特に子どもたちが非常に悲惨な生活をしていることを憂慮されて、厳しい言葉で資本家を糾弾された。レオ13世という方です。ところが、多くの人たちは社会主義になればこういう問題は解決して救われるのだと思っているけれども、それはとんでもない。社会主義になると人間の魂の自立、人間の存在自体も非常に危なくなるのだということを、これも厳しい言葉で警告された。それが Illusions of Socialism、社会主義の幻想です。これは1891年です。しかしその後、1917年、ロシア革命を経て、20世紀の後半過ぎには世界の人口のほぼ3分の1近くを社会主義が支配している。それを非常に憂慮されたのがヨハネ・パウロ2世という方で、そして新しいレーラム・ノヴァルムを、前のレーラム・ノヴァルム作成から100周年を記念して作成するにあたって、アドバイザーに呼ばれて、お手伝いしました。

このヨハネ・パウロ2世という方はポーランドの方で、そしてローマ法王になられてバチカンに行かれるまで過酷な社会主義支配のもとで人々の魂と心を守るという仕事をずっとされて、そしてローマ法王になられて、初めて国を出てバチカンに行かれたのです。ところが、ヨハネ・パウロ2世はポーランドにいらしたころから、こういう考えを持たれていたのです。アメリカが広島と長崎に原子爆弾を落としました。これは人類の歴史上最大の、最悪の罪であると厳しく糾弾されていた。ローマ法王になられてすぐ、第一に日本に行きたい、そして広島・長崎のアメリカの原子爆弾を徹底的に非難、批判して、そしてその後、神の許しを請いたい。広島・長崎、それから後樂園で非常に大きな野外ミサを司式されて、そのときに流暢なすばらしい日本語で、こういうことを話されたのです。平和は人類にとって一番大事な財産である。特に日本の平和憲法は、社会的共通資本という言葉は使われなかったのですが、世界の平和を守るために非常に大事な財産である。みんなの共通の財産である。それを守るということの意味をすばらしい日本語で話されたのです。

ヨハネ・パウロ2世は全世界のこれまでまったく対立していた宗教の責任者の方々を回って歩いて、そして歴史的な和解を実現された。聖なる存在を敬って、そしてそれを神として敬う。そういう気持ちが宗教の原点にあって、神は違うけれども、神をもって自分たちが守っていくのだというその気持ちで結びつきたい。ヨハネ・パウロ2世のお手伝いしたのは、私の一生で一番感動的な時でした。

脱線に脱線を重ねて、どうも失礼しました。（拍手）

フォーラム

立本 立本でございます。

先ほど1時半から皆様ずっとお座りで、ちょっと休憩を入れたとはいえ、腰の痛い方もおられると思います。途中でちょっと背伸びをすとか、周りの人の邪魔にならない程度でしたら、どうぞ遠慮なく腰の方を緩めていただければと思っております。

先ほどは宇沢先生の回顧録といますか、伝記といますか、非常におもしろいお話をお伺いしたわけですが、ご承知のように宇沢先生は、自動車の反対運動を、理論的にだけでなく、実践しておられたというように、環境問題を解決するための取組を率先してやられているわけですが、その先生が経済学者として、どうして自分は経済学者になったのか、そして環境問題を考える上で非常に重要な二つの問題、市場原理主義というのと社会的共通資本、耳慣れない言葉かとも思いますけれども、そういうふうなことに自分の体験からずっとお話しになって、非常に感銘を受けたわけです。特に経済学の道に入ったのが、社会の病を救う学問を志してというお話には非常に心を打たれました。そういうふうなところから市場原理主義ということに対する痛烈な批判を、ご講演時間のほとんどを使って行われたわけです。市場原理主義に対する批判の理論的な支えとなりますのが社会的共通資本ということでした。これは後で植田先生の方から補足をしていただきますけれども、みんなが共通に背負ってその費用を負担していかなければいけない資本ということで、これが非常に広い考え方だというのが先生の特徴で、1つは自然資本、これは自然環境とかそういうもので、それから道路などのインフラストラクチャー、それから制度と言われるものまで含まれます。このような幅広い概念を使われているのは、インフラストラクチャーぐらいから考えられているのかなと思っていましたところ、今日のお話を伺いますと、その社会的共通資本の原点が教育にあったということであるほどと感心させられた次第です。子どもを育てる教育の場というのは聖なる場所であるという安倍先生の話から、医療というところにも立ち入れまして、それが私にとりましては非常に印象に残ったわけです。宗教の話にも立ち入れ、非常に幅広いお話をいただきましたので、今日ここに出席していただいていますパネリストの先生方からは、きっといろいろなご意見を伺えると思います。

これからのディスカッションの流れといたしましては、パネリストの先生方の意見をお聞きしてから、会場からも時間があればちょっとご意見をお受けしようかなと思っておりますので、そのご用意をしておいていただければと思っております。

もう1つ肝心なことを言い忘れておりました。このフォーラムのねらいは、今日お配りしておりますチラシの「知恵と文化の京都環境フォーラム～低炭素社会づくりに生かす京の知恵～」ということです。これの素材となっていますのが、今日お集まりになっている先生方が中心となっている「京都の知恵と文化を生かした環境懇話会」というところで、この1年いろいろなことを話し合っていましたけれども、それを府民の皆様と一緒に考えて発信していく場の一つとして、こういうふうなフォーラムを催した次第で、その内容は先ほど言いましたパンフレットの表紙に書かれている趣意文の4つのパラグラフ、大変詩的に書いてございますが、そういうふうなところになるかと存じます。

前置きはなるべく簡単にさせていただきます、それでは早速フォーラムに入らせていただきます。

まず、先ほど紹介がありましたように、植田先生は環境経済学というのをずっとやっておられます。ただ今の宇沢先生の講演の中で一番ポイントとなるのは、自然環境の保全と経済発展の維持、これが持続的社会的な目玉になるわけですが、そういうふうな環境と経済の両立について整理していただき、そこに抜けているように見えるのが文化なのですが、この懇話会の方では常に文化ということを非常に大切に考えているわけですので、そこらあたりから植田先生の方からお話をいただければと思います。

植田 ご紹介いただきました植田です。

宇沢先生の話は大変スケールも大きかったと思いますし、さまざまな知的な刺激を私たちに与えてくれたと思いますけれども、今、立本先生の方からもお話があったように、この講演のタイトルは「サステイナブル社会における経済と人間生活のあり方」ということで、サステイナブルな社会というのはどんな社会かということについてお話しいただいたように私は思っております。キーワードはお話しいただいたとおりで、社会的共通資本ではないでしょうか。要するに人間や社会にとって最も大切なもの、宇沢先生は特に貨幣には換えられないものということを強調されました。共有の財産ですね。だから、サステイナブルな社会は、そういう共通の財産が充実していく社会のことです。共通の財産がなくなっていくとか壊されていく社会ではなくて、その共通の財産が充実している社会、こういうふうな受けとめられると私は思います。

ですから、サステイナブルな社会というのを社会的共通資本というキーワードで考えて行くと、宇沢先生が話されたとおりで、環境だけのことではありません。これは、私はとても大事な問題だと思います。社会的共通資本として、今日特にお話しされたのは教育・医療・金融、こういうふうにお話しされたと思いますが、サステイナブルな社会は教育とか医療とかが、私たちの生活にとっての共通基盤として、より充実していくような社会でないといけないということです。同じような意味で、金融も、社会的共通資本としての金融という役割を果たすものでないといけないということです。金融システムというのは昔からあるといえばあるわけですが、それがどういう役割を果たし、どういうシステムになっているかが重要なのです。教育にしろ、医療にしろ。それが今日宇沢先生が話された社会的共通資本としての役割を本当に果たすものになっているかどうか、これが我々がチェックしないといけない非常に重要な点だと思います。

社会的共通資本について、宇沢先生は随分たくさんいろいろなことをお書きになっておられまして、一番初めにこのことを最も本格的に提起されたのは多分 1974 年の論文だったと思いますが、その後いろいろな解説的なものも含めましてたくさんお書きになっておられます。これには道路とか橋などのインフラというような用語で呼ばれるようなものが、産業活動や生活に共通の基盤として、発展段階の初期には重要なものだというので、含まれているわけです。

しかし、そういうものだけではなくて、医療とか教育というような目に見えにくいものも含まれる。もちろん学校とか病院は建物がありますが、行われている教育の内容は目に見えないですね。あるいは医療が本当にどういう状態にあるかというのは目で見ただけではわからないところがあります。教育というのは対人的なもの。医療もそうです。福祉も

そうですけども、本当にいい教育になっているか、本当にいい医療になっているか、いい福祉になっているかというのは目にはなかなか見えないものです。しかし、そういうものも社会的共通資本だと言っているわけです。道路や橋と同じようなものかと言われると、内容的には随分違うように見えるけれども、社会にとっての共通財産であるという点では共通しているわけです。そういう性格のものだと言っているわけです。

今日の環境という話につなげていくと、道路や橋などの社会資本、教育とか医療、金融などの制度資本、それに加えて自然資本、この3つを合わせて社会的共通資本というふうに宇沢先生は説明されているわけです。その中で自然資本は、私たちにとっての究極的な基盤といいますか、そういうものだと思います。

今、温暖化が大変大きな問題になりまして、温暖化防止が課題になっておりますが、これは英語でよくクライメイト・チェンジという言い方をしていると思うのですが、一昨年のノーベル賞をもらったIPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change）、日本語訳は「気候変動に関する政府間パネル」と訳しています。しかし私は正確な訳ではないと実は思っています、クライメイト・チェンジというのは、本当は気候を変えてしまう、気候が変化するというのではないかと思うのです。本当は変えてはいけないものを変えようとしている、あるいは変わっていつているということが問題にされているのではないかと思います。中国語訳は変化です。変動にはなっていない。私は変化の方が正しいのではないかと思っていますのですけれども、政府もマスコミ全部、変動で進めておりますので変えようがなくなっているようなところがあるのですが、つまり気候というのも自然資本なのです。宇沢先生の言うておられる自然資本そのもの、つまり社会的共通資本の一部としての自然資本というふうになっていて、これは農業社会だと特にわかりやすかったと思うのですけれども、つまりお天道さまですから、これは私たちが変えられるものではないのです。外側にあるものです。だから今の社会の大変大きな問題は、そういう人間活動や社会にとって一番の基盤になっているものを壊しているのではないかということが警告として発せられていると思います。

ですので、私は宇沢先生の考え方は非常に重要な視点を提起している、この環境の問題を考えるとサステナブルな社会を考える場合の一番基本的な問題を提示していると思っております、今言った医療や教育ということも含めて、同時に温暖化防止というようなことと自然資本としての気候をどういうふうに次の世代によりよい状態で渡していけるか、これがサステナブル社会の一番重要なポイントではないかと思います。

今日宇沢先生が話された中でもう1点、私は、その社会的共通資本を考えるときの重要な視点は、これをだれが維持し、次の世代へ渡していくためにやっていかなければいけないかということで、これを今後討議していかないといけないのですが、宇沢先生はどういうふうにおっしゃったかという、1つは、市場原理主義はまずいですよと。原理主義ですから市場が全部だめと言っているわけではないと思いますが、しかし原理主義でやってしまうとだめだ。お金に換えられないようなものも全部換えてしまうみたいな発想はよくないとおっしゃっておられました。もう1つ重要なことをおっしゃっていたのは、1回だけしかお使いにならなかつたように思いますけれども、官僚的支配もよくないとおっしゃっているわけです。だから、政府に任せてしまえばうまくいくみたいな発想もよくないのです。非常に強調されておられたのは、職業倫理に基づいた専門家の重要な役割、こ

これは医療とか教育においてとりわけ強調されることだと思うのですが、何らかの意味の倫理的基準が入り込んだ運営システム、これは社会が合意している倫理基準みたいなものではないでしょうか。そういうものに基づいた運営システムというようなことをおっしゃっておられるように思います。

ここに文化との関係が本当はあるのではないかというふうに思うのです。つまり市場原理主義というのと官僚機構というのは両極にあるようで、この2つともだめで、その社会が持っている、社会が合意している倫理基準に基づく運営システムが必要になりますので、これこそ、その社会がどういう運営を求めるといふことと関わりを持っているのではないかと思います。

自然との関係では実はサステナブルという用語は 87 年のブルントラント委員会が大変有名になって、これが世界にこの用語を広げたわけですが、実はその前に、1980年にワールド・カンサベーション・ストラテジー、「世界保全戦略」を国際自然保護連合が出しているわけです。これが最初の提起だと言ってもいいのですが、これは国際自然保護連合ですでおわかりだと思いますが、自然を保護しようという気持ちを持っております。しかし、人間の社会は自然を利用しないと生きていけないのです。農業は自然の完全な改造です。ですから、大規模な環境破壊の最初は農業だとも言えるように思うのです。ただ、農業はもちろん自然の恵みを基礎にしていましたから、そういう意味で単純な環境破壊とだけは呼べないとは思いますが。ということで、実はすごく矛盾したこと、利用しながら保護するといいますが、保護しながら利用する、こういうことをやっていく。ここにやはり自然との関わり方がどういふふうになっているかという、それはそれこそ気候風土によっても、民族的にも違ふかもしれないし、いろいろな違いを持っていると思うのですが、人間と自然との関わり方ということになると思うのですが、利用と保護を統一するのはサステナブルな利用の仕方しかあり得ないということで、その中身が問われてくるのではないかなと思います。

立本 ありがとうございます。今のお話で、宇沢先生のお話のエッセンスがおわかりになったのではないのでしょうか。それはさておきまして、経済学者がお話しになると、偏見かもしれませんが、文化の香りがちょっと少ないかなという感じがいたしまして、今日は池坊先生に来ていただいておりますので、華道を通じた人としての関わりとか、そういうふうな観点からお話をお願いします。

池坊 こんにちは、池坊美佳と申します。

先ほどご講演を聞かせていただいて、そして両隣に座っていらっしゃる先生方の真ん中にいるのが本当に心細くて、私もそちら側でお話を聞いてしまいたいぐらいの心境なのですが、私は私と関わっているいけ花や自然のお話しかさせていただけないのですけれども、もともといけ花はずっと足で生けよというふうに言われてきました。それは自然の野に咲く花を自分の足で探して、摘み取ってきて、自分の作品を生けよという意味です。

もともといけ花は仏様に供えるお花、供花から成り立ちました。仏様に供えるお花ですが、昔、医療がなかった時代に、自分の家族や愛する者が病に苦しんでいるときに、先ほど申し上げたように、自然に咲く花に祈りを込めて仏様に供えるお花からいけ花は生まれたと言われてます。そういう意味では、自然の美しさを表現するということイコール自然を知るといふことがいけ花そのものだと言えますね。私はいけ花が心の病を治してくれ

ていると思います。先ほど先生は経済でというふうにおっしゃっていましたが、私はいけ花が心の病を治してくれているように思っています。

やはり自然に咲く花を見て美しいと感動することはもちろんですが、美しい花だけではなく、雨に打たれたり、風雪に耐える姿だったり、破れたり、朽ちた葉さえも趣を感じるのが日本人の感性であり、いけ花の美しさだと思っております。いけ花も、いつも満開の美しい花だけを使うのではなく、つぼみから朽ちるまでの花の命を見せるためにあえて風雪に耐えた花や葉っぱのようにちょっと手でちぎってみたり、朽ちた花をわざと使ってみたりします。

花を生ける心は本当に自然の心そのものなのです。

今は地球温暖化が問題になっています。お花屋さんには四季折々ではなく、1年中あるお花もたくさんあります。それでもやはりいけ花は四季のお花を使います。お着物もそうかもしれませんが、季節の先取りをして、四季を表現できるように、お花屋や野山原で花材を集めます。

ただ、先ほど申し上げたように、地球温暖化のせいで四季も昔ほどメリハリがなくなってきて、例えば昔でしたら4月の入学式のころには必ず桜が咲いていましたが、今は3月末で桜が散ってしまったり、逆に秋に桜が咲いたりとか、花で季節を感じるものが少なくなってきたのは確かかもしれません。でも、京都に観光にいらっしゃる方は四季折々の自然に触れて京都って本当に素晴らしいと言ってくださいます。こういう温暖化が進む中でもこれからも日本の伝統文化の1つであるいけ花は四季折々のお花を使って日本の美しい四季を表現していきたいと思っております。それが一番自然を守ることであり、私たちができる環境への取組ではないかと思っております。

やはり日本に生まれたこと、この京都に生まれたことを誇りに思っていきたいと思っております。華道というと美しいお花ばかりに触れて、例えば環境への取り組みはされているのですかというふうに最近よく質問もお受けします。私は今、池坊の青年部の仕事をしていますが、青年部で華道人としてできる環境への取組ということを考えました。華道人も美しく咲き乱れているお花だけを扱っているのではないのだということで、では何ができるかというときに、でも、そんな大層なことにはできないのです。一番身近で継続できる環境への取り組みは何だろうと考えたときにこの切り落とした小枝などで何かもっと別の表現を試みようということで、「もったいないプロジェクト」というのを池坊の青年部で3年前に立ち上げました。使用済みの割り箸を洗って、乾かしてというところから始めて、あとは練習用、お稽古用で使った小枝などを集めてきて、そこでオブジェなどを作ってみました。

実は池坊の中では、もともと私をはじめ4人ぐらいで始めたのですけれども、華道という美しいお花を扱っているのかかわらず、使い古した割り箸、きれいに洗ってはいるのですけれども、割り箸を使うのはどうだ、いや、そんな捨てる小枝を使うのはどうだという意見は、正直、ものすごく出ました。私も何度もめげそうになりましたが、性格上、やらないよりやって反省した方がいいと思ったので、プロジェクトを続ける中で、例えば割り箸は今、コンビニでくれたり、どこだって何かを買うとくれるのですけれども、でも割り箸と竹箸は分別が違うのだとか、その割り箸をひっつけるときにボンドでひっつけてしまうと回収はしてもらえないとか、すごく小さいことなのですけれども、いけ花を通して、

知らなかった小さな小さな環境への取り組みということをおは華道人として自分自身で勉強するようになりました。それは本当に先ほどのご講演のように先生方のお話には比較にならないくらい小さな話なのですが、華道人としてできること、自然を守りながら伝統文化の1つであるいけ花をずっと伝え続けていきたいと思っていますので、華道人としてできる環境への取り組みということは続けていきたいなと思っています。

立本 ありがとうございます。華道人の環境への取り組みにとどまらず広い視野からお話いただいたと思います。

お花とか、お茶とか、あるいはもっと具体的な構造物で言えば庭、あるいは神社、そういうようなところで日本の特質を見れば、日本人の特質というのは自然を文化の中に取り入れて、しかも文化の中で自然を生かすという視点に尽きるのではないかと私は常々思っているのです。ただ今のお話は、まさしくそのような日本文化の特質を生かして環境への取組をしなければならないというご発言だと伺いました。もうお一方、哲学者か宗教学者かちょっとよくわかりませんが、山折先生に、京都の文化を醸成してきた自然との共生という考え方についてお話しいただければと思います。

山折 哲学者でもない、宗教学者でもない、老人フリーターの1人ですが、風邪を引いておまして、がらがら声で申しわけございませんが、お許しいただきたいと思います。

私、よく京都タワーに上るのですよ。好きだから上るということもあるのですが、あのタワーに上って、展望台に立って360度見回しますと、京都という都市空間の危機的な状況と可能性と、その両方が目に映るような気になるのですね。

それはどういうことかといいますと、市街地、つまり盆地部分の市街地の景観にどんどんコンクリートと鉄骨で造られたビルが建ち並ぶようになっております。小さきま、どんどんふえている感じです。かつては恐らくほとんどが木造建築、木の香りを漂わせるような都市景観だったのが、そういう風景に変わりつつある。これはやはり京都の千年の伝統・歴史というものを考えた場合、危機的な状況、そのシンボルではないのかと私は思わざるを得ないのです。

ところが、もう少し視線を延ばして周辺の東山、北山、西山に眼差しを向けますと、そこには実に美しい、なだらかな森と樹林に覆われた世界が展開している。それを見ると、市街地空間を見たときの胸の中に突き刺さる感じとはまったく違った、自然の中に取り巻かれている、抱かれているという平安な気持ちになるのですよね。これからの京都を考える場合に、こういう2つの要因を持っている都市をどうするか、これは非常に大きな課題ではないかと思うようになりました。

それで、特に可能性として私に映ります京都五山といいますか、京都三山といいますか、その山並みの美しさというものは、これは千年かけて育て上げてきた人間たちの営為によってあれは作り上げられてきたと私は思うのです。その三山のどこからも高層建築は見えません。塔などというようなものも見えません。自然そのものの景観を漂わせているのですが、しかし、ご承知のように、この三山、五山に近づいていきますと、だんだんその樹林の影に、林の背後に、あるいは木の葉隠れに寺院が建てられていたり、神社が造られていたりするわけですね。この南禅寺がまさにそうであります。金閣、銀閣、清水寺、全部そうであります。山麓から中腹、山頂にかけてさまざまな神社やお寺が建てられてき

ているわけでありますが、それが一定の距離を置いて、つまり京都市内の中心部分から眺めると、それらが全部樹林に覆われているということです。

そういう都市計画、建物の建て方を一体だれが、いつ、どのようにして発見したのか、ここがすごいと思うのですね。遠くから見ておきますと、それは単なる山並みにすぎませんけれども、美しい自然だなど嘆声を発していればいいわけですけども、実は、そうするためには、その森の中、山の中にさまざまな神仏の領域を作り上げてきた人々のいわば心の世界が展開しているということです。ここからやっぱり我々は学ばなければいけないのではないのか。人間と自然が共生する原理、それは都市形成を通して日本人が作り上げてきたものではないのか。私は、これは教育の場においても、さまざまな社会資本を維持し保全していく上でも、この教訓、知恵は学んでいかなければいけないだろうと思っているのですよ。

そう考えたときに、この京都市街地におけるビルの乱立という問題をどう考えるかです。これはある程度必要性に基づいて、多くの人々の要望に基づいてこういう状況になってきているわけでありますが、その中でもできるだけ木造の香りというか、木の香りというものをどのようにして回復していくか。これが京都盆地を取り巻いている三山の文化、五山の伝統というものと対応させて考えなければならぬ大きな課題ではないかと実は私は思っているのです。

京都というのは千年の歴史のある都であるということ为先ほど申しましたけれども、これだけの歴史と伝統のある都を持っている都市、それは世界を探してもそう多くはないのですね。私は5つぐらいしか思い当たらないのですよ。その代表の1つがイスラエルのエルサレム、これは3000年の伝統がある都市であります。それからインドのガンジス川の中流域に展開しておりますヒンドゥー教の最大の聖地、ベナレス。それから長安の都から伝統を引き継いでいる中国の西安でしょうか。そしてもう1つさらにつけ加えれば、ロシアのモスクワがそうかもしれませぬ。これも優に1000年の歴史を持っている都市であります。そういうエルサレムとか、ベナレスとか、西安とか、そしてモスクワに参りますと、真っ先に旅人としての私の目の前にあらわれてくるのは巨大な建造物であります。高い尖塔であります。巨大な城壁であります。そういうものは嫌でも真っ先に眼前に突き刺さってまいります。それに比べると、その周辺を取り巻いている自然的景観というものは非常に貧しい。貧相にしか見えないのです。私は何もアルプスのような山岳が控えているからすばらしい山岳地帯であるとは思わないのです。自然の美しさというのは自然の魅力をどうその土地が生かしてきたかどうかに関わっていると思います。まったくそういう自然的景観がないわけではないのですよね、ベナレスにしても、モスクワにしても。しかし、真っ先に目につくのは巨大な建造物、人工物であります。

例えばエルサレムに参りますと、まず大きなユダヤ教の神殿というのがあります。1枚の壁、これは破壊されて1枚の壁しか残されておられません、巨大な壁という人工物です。その前にイスラム教の巨大なドームが目につきます。その脇に、イエス・キリストがゴルゴダの丘で処刑された、その丘の上に教会が建てられております。教会とドームと壁です。これがエルサレムという聖地を象徴する人工物なのです。

インドのベナレスの場合は、ガンジス川の西側に半円状に展開した大体130万ぐらいの都市でありますが、中心部分がヒンドゥー教の聖堂が建ち並んでおります。それを取り巻

くように同心円状にイスラム教のモスク、尖塔が建ち並んでいます。一番外周部に、一番後からインドを征服したイギリスの手によって教会・学校・病院等々の近代的な建築物がずっと建ち並んでいる。3層構造をなして、古代から現代に至る、その時期を代表する建物が嫌でも目に飛び込んでくる。自然的景観といえ、あのガンジスの流れだけではありません。それをよしとするのか、問題ありとするのかは我々の美意識の問題かもしれませんが、自然観の問題とこれは非常に深く関わっていると思います。

モスクワがそうですよ。あそこはクレムリン城という巨大なお城で成り立っている都市です。その中にギリシャ正教の聖堂やロマノフ王朝の宮殿が建ち並んでいる。革命後はそこをソ連共産党が占拠して、大会議場に利用したり、さまざまな施設に流用してきた。まづクレムリンという大きなお城が目飛び込んでくる。

中国の西安もそうであります。それは長安時代以降の巨大建築物が、宮殿であれ、寺院であれ、道観（道教の寺院）であれ、至るところに建ち並んでいる。そういう千年の伝統のある歴史を持つ都市と比べると、この京都という都市の特異性というのがよくわかるのです。

都市の中心から見ると三山、五山のなだらかな、平静な、優美な山並みの世界が我々を非常に平安な気持ちにさせてくれる。同時に、近づくと、その中に千年の伝統のあるさまざまな建造物が木の葉隠れに建てられてきている。この自然との調和の感覚というのは、世界の他の宗教都市、あるいはそれが現在は政治都市に変貌しているわけではありますが、そういう都市と比べてもものすごく特徴のある世界だと私は思っておりますので、それだけに、先ほどの盆地部分、市街地部分における都市景観の変化の仕方というものを今後どうするかということが非常に重要な問題になってきているのではないのかと、こう思っているところであります。

立本 ありがとうございます。ただ今の最後のお話ですが、京都というのは、古代から「京」と書いて「みやこ」と読ませたり「きょう」と読ませたりするのですが、いずれにしても中心となる都だったということですね。千年持続型都の研究はぜひ京都でも必要だということで、感性とか共通感覚とか、そういうふうな面からちょっと掘り起こせないかというプロジェクトを立てられるかどうか、地球研、私の研究所でもちょっと考えております。

地球研では地球環境問題の根源は文化の問題であるということを最初から大テーマにしております。その割にはあまり文化の研究をしていないのですけれども、これから京都の皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。そういうふうな意味で、今日のテーマである経済・環境・文化というのは、地球研のテーマそのものであると考えています。環境問題を解決する1つの大きな柱は科学技術の進歩であったことは確かです。例えば、原子力で代替エネルギーを生み出すように、科学技術体系というようなものをどんどんと整備すればいいという考え方です。我々の考え方は科学技術体系を決して否定するわけではないのですけれども、そのときにやはり文化の多様性というか、文化の複数性というか、日本の場合、アメリカの場合、そういうふうなことを考えていく必要があります、むしろライフスタイルを見直すことが先決だと考えています。時には代替的な科学技術体系も考えなければいけないが、広い意味での人間文化、ライフスタイルを考え直すことが大切だと考えているわけです。

具体的に今、3人の先生方のご意見が出まして、他の先生方のいろいろな意見に触発されて、さらにちょっとつけ加えておきたいということがあるかと存じますので、さっきの順でもう一度やりましょうか。植田先生からお願いします。

植田 文化というふうに言われた場合に、山折先生が最初におっしゃられた自然と人間の共生といいますか、この考え方はとても大事な話で、経済学はやっぱり最初は人間と人間を扱っているのです。それはそれでとても大事な問題だと私は思いますが、人間と人間の間には通常は物が媒介しておりまして、それを端的に言えば取り合ったりとかいうことをしているというような、その問題を中心的に扱うという形で経済学はできている。

ところが、実はそれには大きな前提があって、今日の宇沢先生の話だと社会的共通資本としての自然ということになると思うのですけれども、実はその自然がいわば無限のようにあるというか、何をしても自然は壊れないというか。確かに人間はちっぽけな存在で、自然の方が大きい。それはそうだということだと思っております。もともとは。しかし、科学技術の発展というようなものは人間の一種の自然改造能力といいますか、そういうものを恐ろしく高めてしましまして、それが気候すら変えるというようなことになったので、先人はいろいろな形で知恵を、まさに一種の文化として自然と人間の共生のあり方みたいなことを作り出していたのだと思うのですが、そういうものを意識的に経済の中に組み入れる必要が出てきたということは明らかなことではないかというふうに思います。

私は環境経済学を専門にしておりますが、日本の大学で環境経済学という講座ができたのは1980年なのですが、80年代の終わりの地球環境問題以降、少しそういう分野の必要性が認識される、あるいは若い人たちがそういう研究をすべきだというふうに思っただけでかなりやるようになるわけですが、大きな背景として申し上げると、今申し上げたように長らく経済学は自然との関係を考えずに、人間社会の内部の問題だけを扱ってきました。それを改めて、人間のための経済、自然と人間のための経済といいますか、そういうことを考えていかないといけなくなったと思っております。

立本 ありがとうございます。ちょっとお聞きしてよろしいですか。経済学が人間と人間の関係の学問であるというのはよくわかるのですが、何か人間をお忘れではないですかという、そこら辺は最近の経済学ではどうなっているのですか。例えば人間というのをホモエコノミクスというようなモデルで置きかえて、媒介の方ばかり研究されている、何か生身の人間をお忘れではないですかという、そこら辺は最近の経済学ではどうなっているのですか。

植田 宇沢先生が今日ご指摘されていたお話は、一言で言うと経済学批判をやっておられたということかと思っております。それはとても重要な指摘をされていたと思うのですが、まず、これはなかなか難しい問題だと思うのですが、アダム・スミスという人はよくおわかりのように『諸国民の富』というのを書いた経済学の父なのですが、その前に『道徳感情論』という本を書いておられまして、これは倫理学の本なのですね。彼は道徳哲学の講座の教授だったわけです。倫理学を書いてから『諸国民の富』という経済学を書いて、その後、今、論集として出されていますが、法律論集というのを一応書く予定で、かなりでき上がっていたと言われているわけです。つまり彼は倫理学者であり、経済学者であり、法学者であった。だから、本当は、経済学は一種の総合社会科学の中にあつた。そのときは人間があつたかもしれないということだと思っております。1つの傾向は、やはり一方で専門分

化しますとモデル的に分析するということになりまして、人間はある想定を置かないと分析できないのですね。これは数学的に分析しようと思うと、どうしてもそういうようになってくるといふ面がある。もう一方はおっしゃったとおりで、人間を回復するということが一種の社会を総合的に見るという総合社会科学の道だと思います。これは両方発展させるしかないのかなということをおもったりします。

立本 ありがとうございます。ちょっと要らん質問をしまして、どうもすみません。経済・環境・文化というのと、ともすればモデル的な話になり易く、問題の本質である生活する人間を忘れがちになるので、敢えて質問してみました。

それとも関連しますが、宇沢先生の話で教育、子どもを育てる話というのが非常に大切であるということがありました。未来世代への継承ということは、子どもに伝えていくということで非常に大切なことですが、そういうふうな子どもたちへ伝えていくことの大切さというようなことについて、池坊先生の方から何かコメントをお願いします。

池坊 私は今、お子様とかりタイアされた男性に対して、いけ花レッスンをさせていただったりします。先ほど知恵があつてというお話をされていたのですが、京都にはたくさんの伝統文化や伝統工芸と言われるものがあると思うのですね。たくさんの建築物もありますし。でも、その時代で終わってしまったものもあれば、今もなお継承されているものもあります。その終わってしまったものと継承されているものすごく大きな違いは、その時代を生きている方の必要としているもの、ニーズをプラスアルファしているかどうかだと思うのですね。

いけ花で言わせていただくと、始まりは仏様に供えるお花で、建築様式の変遷とともに日本間、床の間に置くお花が中心でしたが、今、圧倒的に生活様式は洋式になって、日本間や床の間がない家もあります。その中で日本の伝統文化の1つであるいけ花をぜひ、と申し上げても、生活の中に生花を置くスペースがなかったり、花器や剣山がないからいけ花はしませんと言われるのは当然だと思うのですね。ご自分の生活の中に何か関わっていないかと、それは単なる本当に観賞するものになってしまうので、例えば池坊の場合は、日本間、床の間でなくても、玄関先でもこういうお花が置けます、リビング・ダイニングでもこういうお花が置けます、という今の時代の方々の生活様式をプラスアルファして、そこを入口として継承されてきたものも伝えていくことをしています。それをしなければやはり伝統文化の1つ、いけ花だけではなくて、日本の伝統文化や伝統工芸というものは継承されないのではないかなと思っています。継承されてきたものは必ずその時代その時代の人たちが生活様式に何かをプラスアルファして、知恵を出して、伝統を守ってきているのではないかなと思うので、今、お子様に教えるときも花器や剣山という決まりきったものではなくて、ペットボトルの上を切って、これで花器にできますよとか、コップやカップを花器の代わりにするとか、剣山がなくてもオアシスという花を挿すものもありますよと申し上げています。そういう入口というのは、私どものように、伝統文化に関わっている人間が随時提供していかなければいけないのではないかなと思います。

伝統文化を守りたくて、いけ花を続けていただきたくて、でも古きよきものはすごく大切ですし、それは守っていかなければいけないと思います。でも、それだけではなくて、必ずその時代のもの、生活の中に役立つものをちゃんとプラスアルファして、ここから始まるのだよということを私は伝えるようにしています。

立本 ありがとうございます。それでは、山折先生にまたつけ加えた意見をお伺いしたいのですけれども、先ほど哲学者でもなく、宗教学者でもなく、フリーターとおっしゃいました。私は、山折先生はフリーターの哲学者だという印象を持っています。哲学というのはもともといろいろな学問が発生する前に、すべての学問を見通す、総体的に見る、俯瞰的に見る、それが役目だったわけです。今の哲学者は全然それをやっていない人が多いのですが、山折先生はすべてを俯瞰的に見られるという意味で本当の哲学者であろうというふうに勝手に決め付けた上で、そういうふうな哲学者として大局的に今までの議論を見ていただきまして、お風邪なのに申し訳ありませんが、コメントをいただければと思います。

山折 また出鼻をくじかれてしまったような感じなのですが、本当の感想めいたこととお話しさせていただきたいと思います。

私はフリーターですから、よく旅に出ることがありまして、九州方面から新幹線に乗って京都に近づいてまいりますと、大体、右手に五重塔が見えてまいります。ああ、そろそろ降りる支度をしなければならぬ。あの黒ずんだ墨絵のような五重塔が非常にびったり私の気持ちに合って、いよいよ京都だよとささやきかけてくれる。逆に東京に参りまして東京から帰るとき、同じように新幹線に乗って京都が近づいてまいりますと、トンネルをくぐり抜けると右手に京都タワーが、白いタワーが見えてまいります。いつの間にか京都という都市は黒い塔と白い塔、2つの塔によって象徴される都市だな、あるいは世界だなと思うようになりました。黒い塔は伝統を、白い塔は近代をそれぞれ象徴している。それを見事に今まで調和させて発展してきた、そういう都市だなという思いが募るようになりました。

その五重塔でありますけれども、これは以前から不思議だなと思っているのですが、日本の各地に五重塔とか三重塔という塔がたくさん建てられております。その三重塔、五重塔のほとんどすべてが屋根、庇が水平に伸びているのですよ。世界にはいろいろなところにいろいろな塔が建てられておりますけれども、屋根に当たる部分、庇に当たる部分があるように水平に伸びている塔はまず1つもないと言っていい。同じ仏教圏ということを考えても、インドの塔はストゥーパと言いますが、屋根部分がほとんどないに等しい。チベットに参りますとチオルテンというストゥーパのチベット型というのがありますけれども、これにも屋根、庇に当たる部分がありません。垂直に伸びている。天と地を結ぶのが塔の本来の性格であると言わなければならないの自己主張をして見えるのですね。

中国におきましてもそうです。例えば西安に参りますと、空海が上ったと言われている大雁塔というのがあります。高い塔ですよ。これはほとんど限りなく日本の五重塔とか三重塔の形に構造的には似ているのですけれども、屋根に当たる部分、庇に当たる部分がほとんど皆無に近い。ないわけではありません。形がほんの尾てい骨のようにつけられているだけで、横には伸びていない。それはヨーロッパにおける教会の尖塔、イスラム教のモスクのそばに建てられている尖塔、全部そうであります。天と地を結ぶもの、それを象徴するものが塔であります。

ところが不思議なことに、同じ仏教の影響を受けて建てられた日本の寺院に建てられている五重塔、三重塔はすべて屋根が水平に伸びている。これは不思議だなと思っておりました。だいぶ前から私は、それは恐らく背後に展開する日本の自然的景観のリズムと合致

させるため、調和をとるためにあのような水平にのびる、なだらかな屋根、庇部分を作ったのではないかと考えるようになった。そう思いますと、東寺の五重塔の、あの墨絵のような黒い塔の横に伸びた屋根の稜線、リズムというものが、背後に展開する京都を取り巻く山々、それこそ五山の山並みの稜線と非常にうまく調和をとっているということがよくわかるような気がします。それは奈良においてもそうです。日本各地のどこの五重塔、三重塔も、それ取り巻いている自然的景観と微妙な調和をとっているということがわかるのですね。この美意識こそが日本文化の根幹をなすものの1つではないのかと思うようになりました。

そこでなのですけれども、いろいろな教科書、参考書に寺院のこと、お寺のこと、塔のことが詳しく書かれているわけでありますが、塔の説明をそのような自然との関係において、日本の環境との関係において説明しようとする試みがほとんどないのですね。それは何も塔に限りません。先ほど来、教育の問題が出ておりましたけれども、こういうところからやはりしっかりした日本の文化に根差した建築物のあり方というものを、自然環境との関係性のもとに解き直してみるという試みが、これからの若い世代に伝えていかなければならない我々の世代の責任ではないのかなと、そう反省するようになっていくわけであります。こういう問題は一、二にとどまらないと思います。

第2番目の問題は、経済性の問題と言ったらいいのでしょうかね。全国から京都に多くの方々観光客としておいでになりますけれども、東寺の五重塔においでになる方々と、あの白い京都タワーにお上りになるためにおいでになる方、どちらがどういう経済効果を果たしているのかということを経済学的、社会学的に分析してほしいなという気がするわけですね。それは現代の問題としてと同時に、100年、200年、300年、京都タワーは建てられてからまだ50年もたっていないと思いますけれども、つまりそういう時間的な流れの中で、それがどういう経済効果を果たしているのか。こういう研究は余りないのではないのかなと、私は経済のことはよく知りませんが。

そういうことを考えていきますと、今から大体1200年前に空海が建てたと言われている東寺及び五重塔が、日本の社会に対して与えた経済効果、それに絞って議論すると、思わぬ結論が出てくるのではないのだろうか。そういう歴史経済学という分野があってもいいのではないのか。これは経済のことを全然知らない人間の言うことでありますから眉唾ものでありますけれども、そんな感じを受けるわけですね。

私は、この京都における白い塔、黒い塔という2つの塔が歴史的に持っていた意味を考えることが、芸術・文化・社会・経済、あらゆる分野にわたる諸問題を考えるための糸口になるのではないのだろうか、そんなことを妄想しております。

立本 妄想ではなくて、歴史的に見るということは本当に重要なことだと感銘を受けました。今ちょっと経済の話が出ましたけれども、経済史学というのはよく聞くのですけれども、歴史経済学というのはあるのでしょうか。植田先生、そこら辺はどうでしょうか。

植田 まず、いろいろな塔、歴史的建造物であったりモニュメントであったりいろいろありますが、そういうものを持っている、これは人を呼び寄せる力があったりするということですが、観光経済学というような分野は非常にたくさんやられるようになって、これはとても重要な分野の1つになっているのですね。それから、何でも経済にするなどというご意見もあると思うのですが、文化経済学会というものも随分大きな世界的な学会にな

っていて、そういう文化の持っている経済効果みたいなもの、こういうことを重視するというふうにもなっているということかと思います。

そういう意味で言うと、歴史的な建造物とか、あるいは蓄積したもの、これの重要性というのとはとてもありまして、私も実は大変印象に残っているのは、2年前だったと思うのですが、ポーランドのクラコフという割と古い町がございすけれども、あそこで都市会議みたいなのがございまして、そこで最初に基調報告に立たれた、たしかあの方はポーランドの方だったと思うのですが、持続可能な都市、サステイナブル・シティと言うのですが、最初に出てくるのはカルチュラル・サステイナビリティ、これがまずあってという話で、それに経済とか環境とか社会とかいう、順番がそういうふうになっているというのが大変私は印象に残っていることとございす。

立本 ありがとうございます。もう1つ、山折先生のお話の中で美意識の調和という言葉が出てまいりましたけれども、お花などはそういうようなことを目指しているのではないかなというふうに思いますので、ちょっと池坊先生、コメントをお願いします。

池坊 先ほど申し上げたように、いけ花は本当に自分の感性ですし、自分の表現、心の表現なので、自分の心をどう映し出すかということになります。ずっと伝わってきたものを伝えていくのは私の役目だと思っていますし、それぞれ皆様に役目があるように、私も自分が美しいと思うものを伝えていきたいなと思います。そのために、いろいろな知恵を出して伝えていって、日本が、そして京都が誇れるものであり続けなければいけないなというふうに思っています。

立本 ありがとうございます。このように続けていきますと、パネリストの先生方は幾らでもお話があるかと思えますけれども、せっかくこういうふうな機会を設けて皆さんにお集まりいただきましたので、今までの大きな話でも結構ですし、小さなことでも結構ですので、ご意見がありましたら、ちょっと挙手をお願いいたします。挙手いただいた3人の方にまず質問をお伺いすることにします。その間に、これも聞きたいということがございましたら、あとで追加してください。それでは順番にどうぞ。

質問者1 どうも本当に示唆深いお話をいただきまして、ありがとうございます。

感じたことなのですが、やはり環境をよくするというので10年以上前から言われて、まだ今こんなような状態だと。よたよたしているような状態。日本政府も車1つ、ソーラーにするか、水素ガスにするか、何一つ決まっていない。まだ基点というものがちゃんとできていない。それだから国民はどう動いていいかわからない。勝手にちりちりばらばら環境団体がやっている。こういう統合性のないことでいいのでしょうか。社長が統合しなければ、会社ならすぐつぶれますよ。こういうことから見て、私は、やはり人の心の奥底にあるまず原点から見据えて、その気持ちをよみがえらせるというね。環境も悪くなっている、人の心もサブプライムでこんな不景気で腐りかかっている、それをよみがえらせるというリバイバルという気持ちが必要だ。そして植田先生が言われたように、持続可能性を希求するサステイナブルと。その上に我々人類の、日本人の究極の目的は生存し生き残るというサバイバルなのですね。この三位一体のリバイバル、サステイナブル、サバイバルという概念という明確なるコンセプトを示さなければ、国民はわからないのですね。そしてそういうことから見たら、やはり山折先生の専門の、どういうふうこれから日本人は生きるのかという哲学、フィロソフィ、そしてそれを進める文化も含めたポリシーが必

要ですね。どのようにやるのか。その上にあふれんばかりの人間性、ヒューマンイズムというこの核がなければ、ただやっているだけですわ。それではいけない。そして、やはりその3つを統合された東寺の五重塔のような環境日本アイデンティティーというものが確立しなければならないと思うのですが、山折さん、植田さん、いかがでしょう。

質問者2 簡単な質問をさせていただきます。

社会的共通資本という言葉をよく言われていたのですが、社会的資源という言葉もよく使うと思うのですが、その違いなどを教えていただけたらと思いました。

質問者3 白い塔、黒い塔以外に象牙の塔も白い巨塔もありますが、それは別として、ちょっと聞いておきたいのですが、先生のご提案のようなことは、例えば華道とか茶道と着物とか、食の世界でもいろいろな提案ができると思うのですよ。つまり京都の知恵を引き出す。それをどのような方法というか、組織化あるいは情報の収集でやっていかれるのかというのを聞いておきたいのですよね。京都中のいろいろな知恵を集める方法論をどうするのだというのを聞いておきたいと思います。どなたでもお答えを。

立本 他にございませんでしょうか。よろしゅうございますか。

それでは、最初のコメントと最後の組織化というのはちょっと共通点もございますが、ご指名ですので、まず山折先生にお話を伺いたいと思います。山折先生も昔からこういうふうな懇話会に参加して、いつでも提言だけに終わってしまって、それがどこへ行ったのかわからないという、常々そういうご不満を持っておられますので、そういうふうな点からもちょっとお答えいただければと思います。また、植田先生の名前も挙がっていましたので後でお願いします。

山折 しんどいご質問ですな、これは。まったく賛成です。サスティナブル、リバイバルでしたか、それからサバイバル。サバイバルという言い方には私は必ずしも賛成ではないのですね。そういう問題を解決するセンターを作れ、解決する責任を持つ人間を作れ、そういう要請が社会的に非常に高まっていることはわかります。私も心の底でそう思わないわけではない。しかし、この声が高まってくると、ひょっとするとファシズムに、ナショナリズムに結びつくかもしれない。それよりも今、我々がやるべきことは、一人ひとりができることから実践する以外にないだろう。そういう思いを抱いている人はたくさんいる。日本よしっかりしろ、政治よしっかりしろという声は巷にあふれていますよ、それは。そういう思いを持っている人々と一人ひとりが実践を通して結びついていく。この波がようやくここに来て高まりつつあるなという感じを私は持っているのですよね。10年前までは私は組織的な人間でした。組織に縛られた行動しかできませんでした。そういう組織から自由になって初めて、1人でいることの自由さと、それから逆に不自由さ、1人の力では何もできない。そういう思いをかみしめてまいりました。そういう点で、自分が賛成できる市民的な運動には時間の許す限り1人の立場で参加しようと。ただ、それが行く行くは大きな1つの動きになっていくことは望ましいことですが、1つの権力の体系になったら終わりだなと思うのですよ、そこはね。それは我々の50年、100年の歴史的経験がそういうことを私に思わせているわけでありまして、だからおっしゃることは実に非常によくわかるのですけれども、せっかくフリーターになったのだから、フリーターの地点から出発しようというのが私の今の考え方です。

それからサバイバルの問題は反対だ、必ずしも納得しないと申しましたのは、これは日

資産であるということ。ストックとしてあるもの、それを利用するという、資源というのはそのところが必ずしも明確になっていないと思いますね。ですから、ストックを維持しながら次の世代に渡すと同時に、私たちはそのキャピタルを活用するのですね。そういうものだと思います。ですから、維持し、増やしながらか次の世代に渡すと同時にということなので、私は宇沢先生の基本的な議論に賛成しているわけですが、それに加えて、例えば知識なんかもそうだと思います。知恵とか知識と呼んでいるものね。これは私たちにとってのまさに次の世代にふやしながらか、より活用する。しかも知識のいいところは、みんなに広がっても減らないのですよね。みんなに広がるとコミュニケーションがよりやりやすくなるので、とてもいいものだと思います。ですから、私は知的所有権問題が出ているのはある意味でよくわかるわけですが、知恵とか知識は社会的共通資本の最たるものの1つというふうにも思うので、今後重要なテーマになるように私は理解をしています。

立本 ありがとうございます。3つ目の質問は組織化ということで、私が間違ってお聞きしているのかもわかりませんが、お花とかお茶とか、仏教会とか、こういうのはある意味で組織化はできているわけですね。それに対して、そういうふうな組織化されたものが環境問題にどういうふうな発信するかというふうな根本的な問題もあります。それは別にして、お家元に関係する池坊さんとしては非常に答えにくいかと思いますが、何かコメントのようなことがございましたら、いかがでしょうか。

池坊 私もいろいろな会議に出させていただいて、本当にいろいろな意見をお伺いして、すごくいい本になってそれが返ってくるのですが、この本が会議に出た10人の方の手元にしか行かなくて、何も広がりがなく、何も広がらないことはすごく不満というか、切ないというか、何だったのだろうといつも会議に出ていて思うのです。多分ここにいらっしゃる方は、危機感を持って、環境を心配して、何かご自分でもされていらっしゃるのだと思うのですよね。京都に生きていらっしゃる方がこんなにも京都を心配して危機感を持っていらっしゃることは、すごく素晴らしいと思いましたし、私は華道、茶道、仏教もそうですけれども、京都に多くあるものを通してそれが定着したらいいなと思っています。何か自分でできること、さつき山折先生がおっしゃっていましたが、まず自分にできることから、小さいことから私は始めたいと思っています。

立本 ありがとうございます。だんだんと時間が迫ってまいりましたので、それでは最後に一言ずつつけ加えることがございましたらお願いします。

植田 今日の宇沢先生のお話は大変印象的でしたし、そこでのメッセージだと私が理解したこと、あるいはその後の討議でも基本的にあれだと思ったことは、社会的共通資本という用語でした。前の世代から受け継いできたものを次の世代によくしながら渡していくとか、そういう長い時間的な視野、サステイナブルというのはそういうことですね。だから、経済が非常に難しいのは、すごく近視眼になりやすいということだと思うのです。ですから、そういう長い世代をつないでいく、そういう視点がカギだなどと思いましたし、それをどう実現するかという知恵と文化みたいなものが求められている、そして経済の仕組みも求められている、私はそんな印象でした。

立本 ありがとうございます。池坊先生、よろしいですか。

池坊 私も座らせていただいととても勉強になりましたし、やっぱり自分がよしと思ったことは発信していかなければいけないなと思いました。その発信する力がもしかして大

きな力になるかもしれないし、小さな力のままかもしれないが、発信し続けていかなければいけないなということはずごく学びました。

立本 ありがとうございます。山折先生。

山折 先ほど言葉足らずで美意識の調和なんていうことを申しましたけれども、実は私、京都生活は今年で20年になるのですが、京都の美意識ということを一言で言うと、矛盾する美意識を二重構造化しているなということを感じているのです。1つは先ほど申しました京都タワー上から見た京都三山、五山の墨絵のような世界です。一切の虚飾をぬぐい去った自然そのものを浮かび上がらせるような美的な世界。水墨画の世界と言っていいと思います。ところがもう一方、京都には祇園祭という豪華絢爛、華やかなお祭りがあるわけです。あの行事はどこを見ても水墨的な、ああいう美意識とはまるで正反対のものであるような気がする。バタくさくて、大陸的で、インターナショナルで。どうも京都というのはそういう2つの異質の美意識をうまく構造化したというか、あるいは調和をとるような形で受け入れてきた。それが今日の日本人全体の美意識に非常に大きな影響を与えているのではないか。ある人が京都の文化は何ぞやと問う。これに水墨的な美意識で答える方は、お茶、お花等々の例を挙げるでしょう。それに対してもう一方では、デザインの華やかさ、インターナショナルな性格というものを取り上げて、京都の文化というのは国際的な文化交流の中で花開いたものだよという答え方をします。この二重構造化した美意識の世界が私には非常に興味のあるところであります。

以上であります。

立本 ありがとうございます。本日はたくさんの意見が出ましたが、一言でまとめますと、実は知恵と文化の京都環境フォーラムのチラシの一番初めに収斂していくのではないかと思います。地球温暖化問題が深刻化する中で、春一番も通常よりは10日、2週間ぐらい早く吹きました。そういうふうな中で循環可能な自然環境を維持しつつというのは、これはいわゆる循環型社会の実現ということです。環境への負荷をできる限り小さくしながら、持続可能な社会を形成していくと、今のお話で矛盾を抱えた調和ですが、調和型社会にもなります。これは宇沢先生の基調講演の言葉を借りると、自然環境という自然資本への負荷をできるだけ小さくするインフラストラクチャーと制度になるように、持続可能な社会へ向けて社会的共通資本を整備するような社会を作らなければいけないということになります。そのためにどうすればいいかというのが次のパラグラフに書いています人と自然の共生の理念、あるいはお茶とかお花とかいろいろな面に出てきています京都の高い文化性、これらを利用、活用していかなければいけないということです。それはとりもなおさず、生活の質を高めながら自然との共生や、人と人とのつながりで互いに助け合っていくための知恵と工夫（この知恵と工夫というのは、宇沢先生の話でありましたアートの技になりますが）を各人一人ひとりが見つけて、それを直ちに実践していこうということで、これが今日の結論みたいなことにもなるかと思います。

ここでちょっと欠けておりますのは、先ほど出ました未来世代への責任問題ということでありまして、「持続可能な発展」の概念が出された最初のときの大きな目玉は、未来世代のニーズにこたえるということは皆様ご承知かと思えます。これはちょっと考えると、今の人の思っているニーズで未来世代のニーズを考えることができるのかという疑問もあります。それはともかく大事なのは先ほどから出ております次世代への継承です。教育、

子どもへのしつけ、そういうふうなことが今を生きる私たちには大事であるということで、未来世代への責任問題を考えていかねばならないということです。このチラシでは次世代への継承というのが抜けておりますので、それを付け加えさせていただきました。

一応こういうふうな話であったとまとめさせていただいて、このフォーラムを終わらせていただきます。（拍手）